

万象点描



農的社会デザイン研究所代表 葛谷 栄一氏

組合員自らの協同が原点

先日、東京都小金井市にある劇場・現代座で、合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」が再演され、川崎平右衛門の行動と協同を何よりも大事にする心に感激を新たにしました。木村快氏の脚本・演出で、話は武蔵野台地での新田開発を、多摩郡押立村(現在の東京都府中市押立)の名主であった川崎平右衛門が、農民の協同の力を引き出すことによって成し遂げたというものである。

1707年に宝永大地震が発生し、これに続いて富士山が大噴火した。飢饉(ききん)の続発と復興事業に伴う幕藩財政の悪化から、8代將軍・徳川吉宗によって享保の改革が開始された。この総責

■ 帰ってきた川崎平右衛門

任者を務めたのが大岡越前守忠相で、その目玉が武蔵野台地での新田開発であった。開発は遅々として進まなかったことから、「世襲の役人に代えて、現場で復興事業に取り組んでいる農民・町人の中から優れた人材を抜てき」として任命されたのが川崎平右衛門である。

平右衛門は新田開発を成功させるために、▽まとめ買いによって肥料を安価で調達して農家に貸し渡し、その収穫物を買収するための組合の創設▽幕府から無利息資金を引き出して商人らに貸し出し、その利息を使っての開発資金の獲得や備蓄を進める養いの料組合の設立▽畑を開きながらも作物が取れないために逃げ出した農家が戻ってきた際の立ち帰り料の支給▽飢饉に

備えての稗蔵(ひえぼろ)の設置——など、さまざまな協同組合的な手法を駆使した。これらの手法は、現場を熟知した平右衛門ならではの知恵と工夫であるといえるが、そのベースに協同の心があつたからこそ発想され成功させることができた。これを劇場という空間が、全身全霊をもって受け止めるべく迫っている。

心打たれる場面はいくつもあつた。平右衛門が新田世話人に任命されて初めて行った、不足する水を確保するための村民による井戸掘りの話がある。井戸掘りに際して「皆の衆、これからは村で必要なことは江戸の商人に頼まないで、自分たちでやることにしよう」と、節約と自給を呼び掛ける。いいか、力があるものは力を出せ。知恵がある者は知恵を出せ。心優しい者はみんなに優しくしてやれ」と諭すとともに、食べ物に事欠く村民に労働量に心じるだけでなく、老人や子どもにも一定量の麦を分配する。こうして井戸の掘削を実現させた平右衛門のやり方を見て大岡忠相は「なるほど、同じ百姓でも上から命じられたときの百姓と、おのれがやろうとするときの百姓では力が出し方は何倍も違うのだな」と合点し、「新田開発の儀、平右衛門の心一杯に進めることを許すと高らかに宣言する。

農協の自己改革が急がれる情勢にある。協同組合思想についてあらためて学ぶことも重要であるが、組合員や役員員の研修会などの機会を利用して本劇を鑑賞することをお勧めしたい。組合員自らによる協同が原点であることを納得し、たぐさんのエネルギーをもらえらることを必至である。